

前号掲載の土門剛氏のレポート「任専問題は決着後が恐い」は好評だった。何人かの読者からは電話もいただいた。

「農家に向けて発行している農業専門誌紙で任専問題をあの切り口で解説されたのは初めて」だとお褒め下さる方もあり有り難く感ずるとともに我々が果たすべき役割を改めて感じた次第であった。

その電話の主はさらに、

「日本農業新聞をはじめとする農業専門の新聞や雑誌で任専に関する記事を読んでいると腹が立つて、もうこんなもの読むかと思ってしまう。これは「農業」や「農家」の新聞であるというより「農協」や「農業団体」のための新聞なんだね」と。そして、その電話の主との会話はこんな話題に展開していった。

記事を書いている人は気付いていないのか、それともよっぽど読者を馬鹿だと思っているのではないのだろうか。農協系統組織がいかに大蔵省や銀行に騙されたか、そして悪いのは大蔵省と母体行であると、躍起になって報道し、解説すればするほど（あるいはまったく取上げないメディアもあるが）読者はしらけていくことに。

大蔵省や母体行の非は言うまでもない。しかし農業をする者の立場からすれば、それなら系統組織の経営責任はどうなっているのか。ましてや信用事業として農家の金を預かっている責任はどうなっているのだと問いたくなる。

もし農業専門のジャーナリズムなどというなら、系統組織の弁解や、形を変えた系統組織の広報のような記事だけでなく、「農業問題」としての本質を語るべ

きなのではないか。——それが農家であり、農協組合員である読者の感想というものだ。

同氏は、青年部で活動してきて以来、共済の推進をはじめ農協活動や地域の農業組織に関与してきただけに、現在の農業専門紙の報道姿勢そのものに農協や農業団体の現在を見るようで、読むたびに空しさや切り切れない怒りを感じると話していた。

読者の感想を伝えるために電話の主の言葉を借りたが、それは僕の感想でもあり意見でもある。しかし、我々はそれを糾弾し、現在を嘆息すればそれで済むのだろうか。

電話の主の怒りは、単に農業新聞の編集姿勢の問題というレベルのものではない。農家の利害を代弁する存在であったはずの農協組織が、今回、余りにもあからさまにそして大規模に、組合員への背任ともとれる行為を続けてきたことが露見してしまい、しかも農協の広報機関で

ある日本農業新聞が躍起になって系統組織の弁解を代弁していることへの農家としての苛立ちである。

勘違いしていただたくない。読者の言葉を借りて、日本農業新聞をはじめとする多くの農業専門誌

紙を槍玉にあげ、自らを弁解し自分たちの正当性を語ろうなどというのではない。そんなことより、僕自身を含む農業関係者の存在理由と農業の「現在」を問わずして、我々に安心できる未来などはないと思うのだ。

我が国の農業界は今、西側国家群に対する崩壊前夜の社会主義の国々、あるいは自民党に対するかつての社会

党のイデオロギー的破綻になぞらえてもよい事態にたち至っていると思える。我々はそんな混乱の中でも自らを守り、厳しい環境の中で誇りある立場を維持できるのか。呑気に農業界の現在を批判しながらも、なお農業に落とされる利権や保護のおこぼれを期待している「弱さ」を自らの中に見つけることはないか。誰しも楽しんで転がり込

む利益を保証する利権に執着しがちだ。しかし安楽のなかで弱体化していき、活力や創造力が失われていくのは人の一生も経営も同様ではないのだろうか。

問うべきは我々一人ひとりなのだ。我々自身のために。これまでの安楽な農業界に慣れ親しんでしまった者として己の危うさこそを自問すべきではないか。

行政も団体も、関連企業、そして農家もまた、これまでの既得利権を守ることには汲々とする時代は終わってしまったのだ。農業に対する団体組織としての存在理由を問い、顧客に必要とされる企業たり得るかを問えぬ限り、それらの団体、企業の未来は暗いものにならざるを得ない。農家も自立更生の精神を持たぬものは取り残されていくだろう。

むしろ真摯にそれを問い、団体成立の根拠となつた本来の受益者や、顧客の利益を見つめることの中にしか未来はないのではないか。

今までの常識が通用しなくなる歴史の転換点に我々は立っているのだ。すでに有効な答えを出す力を失ってしまったこれまでの物事の見方や考え方、あるいは問うべき言葉に代わる、新しい思考の枠組みを自ら創り上げていく勇氣と、未来へ向かう夢こそが必要なのである。

混乱は避けられないだろう。しかし、一人ひとりの自助努力と夢が農業の創造的未來に結びついていくのだ。

未來を明るくする夢をこそ見ようではないか。自尊ではなく自負心において。小さくとも未來への夢と次世代への責任を自覚する経営者として、誇りある職業人として。

江刺の稲

「江刺しの稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺しの稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい

第15回 本誌編集長 昆吉則

改めて「問うべきは我より他に無し」